

ローマの聖母子イコンの起源について

加 藤 磨珠枝

1 はじめに

「イコン」とは、ギリシャ語「エイコーン*εἰκὼν*」を語源とし、一般的には「像」や「似姿」を意味している。東方教会で発展をみたイコンは、主として、神や聖母マリア、聖人などを表わした礼拝用の聖なる画像のことをする。しかし、この言葉が意味するものは時代や文脈によって厳密に異なり、正確な定義が難しい。そもそも、モーセの十戒に曰く、「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えてはならない」(『出エジプト記』20：4-5)

この言葉に従うならば、キリスト教美術の多くが「偶像崇拜」として糾弾されなければならなかった。それにもかかわらず、神のイメージは視覚芸術による表現を認められ、イコンという礼拝用画像までも発展させた。その理由を探るために、キリスト教世界におけるイコンの神学的解釈を歴史的に語ろうとするならば、イコノクラスマ（聖像破壊運動。726～843年）を機に交わされた数々の神学論争にまず目を向ける必要があるだろう¹。

イコンは偶像崇拜であるとするビザンティン皇帝によって、イコンが禁じられ、過去のイコンも破壊の対象となった当時、画像表現の可否をめぐってさまざまな議論が行われた²。最終的には画像擁護派の勝利で終わり、それ以降の東方教会にイコンは欠かせないものとなった。ここでは、イコノクラスマの詳細を検証することが目的ではないので、最終的に確認されたイコン肯定の内容について益田朋幸氏の言葉を引用しておく³。

イコンは「窓」に過ぎず、天上の本質を觀想する手段であった。イコンを礼拝することは、物質である偶像を崇拜する行為とは異なる。本来不可視、不可知である神は、イエスによって我々の眼にみえるものとなった（「^{インカーネイション}受肉」）。そのように、神はイコンという媒体によって、我々に可視のものとなる。イコンの意義を否定する者は、受肉の教義を否定することになる……。

こうしたビザンティン世界のイコン論によって、イコンは見えない神の力と人間とを介在する媒体として広く認められるようになった。ただし、イコンそれ自体は、単なる木片であり絵具にすぎないのであるから、神に対しては絶対的な礼拝（ラトレイア）を、描かれた神に対しては相対的な崇敬（プロスキネシス）を捧げることになる。しかし、当時の神学者たちによってなされたこの画像に関する解釈は、イコンそのものの本質を伝えているのだろうか？彼らは、すでに慣行化し実践されていた画像の用法に「矛盾しない説明」をさまざまな角度から加えただけではなかったのか？

東方ビザンティン世界がイコノクラスマに揺れていた時代、ローマはその属州であったにもかかわらず、教皇は、断固として画像擁護を主張した⁴。この対立を機に、それ以前から緊張していた東西教会の溝はさらに深まっていったが、では、論争の焦点となった東方教会の聖画像とローマ教会のそれは、まったく同じものだったのだろうか？従来のイコン研究によれば、イコンはビザンティン帝国に発し、そこから周辺諸国へ伝わっていったとする見方が一般的である。それゆえ、西欧中世のイコンはビザンティンのエコーとして捉えられ、独自の視点からそれを論じたものは少ない。

本稿の目的は、こうした研究の現状を踏まえて、西欧におけるイコン崇拜の歴史に一つの新たな光を投ずることである。なかでも、イコン崇拜の初期段階（イコノクラスマ以前）の作品に焦点をしばり、神学武装される前のイコン生成の実態を再検討してみたい。西方ラテン世界における初期イコンの現存例は限られ、ローマに数点確認されるのみである。しかし、そのなかの古いものは6世紀にまでさかのぼり、シナイ山の聖エカテリニ修道院で発見された有名なイコン群に比肩する重要性を有している。加えて、西欧キリ

スト教世界における画像崇拜の発展を考える出発点としても貴重である。それにもかかわらず、ローマのイコン群は十分に検討されてきたとはいがたい。本稿ではこのローマに残る初期イコンのなかでも、とくに聖母子イコンを中心に考察を行い、そこから得られた知見に基づいて、今後筆者が取り組んでゆく西欧イコン研究の展望を示したい。

2 イコンの起源について

作品研究に入る前に、まず、イコンの起源に関する研究成果をまとめておこう。イコンの歴史は、信者の崇拜がとくに十字架と聖遺物へ向けられていた4世紀を過ぎてから、5世紀にはじまると言われている⁵。その崇拜は6世紀後半には広く普及し⁶、7世紀にはとくにビザンティン世界の信心の一般的特色となった。そのイメージの源泉として、古代美術に端を発する先祖や死者の肖像と皇帝美術が重要な役割を果たしたとされる。とりわけ、皇帝に栄誉を捧げるための公式肖像(ラウラトン)はキリスト教美術に導入され、キリストや聖人のイコンへと変容したという見解が、これまで多くの研究者によって支持され、さまざまな作例とともに例証されてきた⁷。これら2つの源泉に加え、近年の研究では異教の神々のイメージ(彫像および板絵)が与えた影響についても論じられている⁸。

つまりイコンとは、そのはじまりにおいて、死者の肖像、皇帝のイメージ、異教の神々のイメージを受け継いだ古典的な絵画に他ならなかった。キリスト教の画像崇拜は、まだ、それ自身の伝統を有していなかったゆえに、異なる伝統と異なるジャンルから派生したさまざまな形式を受け継いだ。こうした特徴は、私たちが中世イコンに対して持っている先入観——ステレオタイプ化された容貌と厳格に象徴化されたコンセプト——とは、かけ離れたものである。筆者は、こうしたイコンの起源に関する従来の見方に異論があるわけではない。ただし、これらのイコン研究では、5世紀以前のことがほとんど問題として取り上げられることはなかった⁹。

そのような状況に一石を投じたのが、キリスト・イコンに関するマシュウズの最近の論文である¹⁰。彼は3世紀に編纂された外典『ヨハネ行伝』¹¹に見

られるイコン崇拝の記述などをもとに、キリスト教徒による最初期のイコン崇拝は2～3世紀から私的な環境において始められ¹²、そこで行われた画像崇拝の実践は同時代の異教のものに類似していた、と結論づけた。こうしたイコン崇拝のはじまりに関する実践の考察は、古代美術と密接な関わりをもったイコン画の特徴を鑑みると、従来のものよりも説得力があるようと思われる。また2～3世紀という編年については、今後さらなる検討が必要となるだろうが、カタコンベ壁画や石棺彫刻など、その他の初期キリスト教図像の発展が3世紀以降、次第に明らかな形で現れてくることと照らし合わせてみても、5～6世紀という従来のイコン生成の見解は遅すぎる感がある¹³。

3 聖母子イコンの起源

これまでイコン全般の起源に関する研究史を概観してきたが、聖母子イコンの場合はどうであろうか。バルトヤンニによれば¹⁴、古文献に登場する聖母子像の最初期の例はヨアンネス・クリュソストモス（340/50–417年）の記述によるもので、「指輪の飾り、さまざまな浮彫り、小瓶、そして特別な部屋の壁」¹⁵に見られたらしい。その後、431年のエフェソスの公会議において、マリアに「テオトコス（神の母）」の称号が正式に認められてから、聖母崇拝は勢いを得て高まり、5～6世紀には、シリア、パレスティナからさまざまな聖母表現がコンスタンティノポリスやローマにもたらされた。

当時の首都コンスタンティノポリスでは、パレスティナから運ばれた聖母の遺物や由緒ぶかいイコンを収める聖堂がつぎつぎと建設された。このなかで殊に名高いのは、ブラケルナイ¹⁶、カルコプラティア¹⁷、ホデゴス¹⁸の諸聖堂である。後の伝承によると、ブラケルナイ聖堂には「ブラケルニオティッサ」（オランス型）と「エピスケプシス」（「ニコポイア型」と呼ばれ、胸にクリペウスの幼児像をおく上半身または全身聖母像）の2つのイコンが祀られ、さまざまな奇跡を起こした。一方、カルコプラティア聖堂の「ハギオソリティッサ」（聖櫃）と呼ばれる高名なイコンは、斜め右を向き両手を差し出して祈る「執り成しの聖母」として人気を博した。3つめのホデゴス

聖堂には、前者と異なりいわゆる聖遺物は存在しなかったが、「ホデゲトリア」（正面を向く聖母の斜め横に嬰児イエスを配した全身像聖母子）と呼ばれる聖母子イコンが祀られた。後の伝承によると、このイコンは聖母の存命中に使徒ルカが描いたという神聖な起源を持つものと考えられていた¹⁹。加えて、このホデゲトリアのイコンは、ビザンティン帝国滅亡の時にいたるまで、しばしば戦時の危機に首都を護り、皇族をはじめ多くの信者、巡礼の崇敬の対象となったことがさまざまな古文献で伝えられている²⁰。

こうした首都コンスタンティノポリスにおける聖母の聖遺物および聖母子イコンの果たした重要性と比較すると、ローマにおける聖母信仰およびイコン崇敬のはじまりはいまだ明らかではない。それゆえ、結果的に、東方世界がその信仰において主導的な役割を果たしたとされ、首都コンスタンティノポリスに倣って「7世紀初頭以来、ローマにおいても、由緒ある聖堂におのおの一点の聖母子イコンを祀る習慣がしだいに定着した」²¹と一般的には考えられている。それは最初のギリシア人教皇セルギウス1世（在位687–701年）の時代に、聖母に関する東方の一群の祝日（マリアの誕生、マリアのお潔め、マリアのお告げ、マリアの被昇天）がローマに導入されたことによっても受け入れられた²²。

しかし、ベルティングの指摘にもあるごとく、ローマの聖母子イコンに関する現存作例は、ビザンティン帝国で発見されたものと同じぐらい古いものであり、聖母のイコンは彼女の祝日が制定される以前から広まっていたものと考えられる²³。実際、ローマには教皇シクストゥス3世（在位432–440年）によって聖母マリアに捧げられた最初の大バシリカである、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂があり、その後も聖母マリアの聖堂および礼拝堂は増加していった。加えて、ローマでは由緒のある聖母マリアの各聖堂に、聖堂を記念する聖母子イコンが祀られていたことから、600年以前の早い時期からそれが聖堂に掲げられていたことは十分考えられる。ここで、ローマに残る聖母子イコンを見ていく。

4 ローマの聖母子イコン

ローマに伝えられている中世のイコンに関する研究が本格的に始められたのは1950年代になってからのことである。カルロ・ベルテッリとローマ修復研究所の貢献によるところが大きい²⁴。その後、すでに言及したベルティングらの研究により、ローマの聖母子イコンが、どのように崇拜されていたかが一層明らかになった²⁵。以下では、これらの先行研究を踏まえながら、聖母子イコンを概観してゆく。

現存するローマ・イコンの数は限られているが、初期の聖母子イコンは現在5点数えられる。その中で、フォルムにあるサンタ・マリア・ノーヴァ聖堂（現在のサンタ・フランチェスカ・ロマーナ聖堂）所蔵の聖母子イコンは、かつて同じフォルムのサンタ・マリア・アンティークア聖堂に祀られていたが、847年の地震でこの聖堂が放棄されノーヴァ聖堂に移転した際にそこからもたらされたと考えられている（図1）²⁶。この聖母子は、元来、亜麻布の上にエンコースティック（蠟画）の技法で描かれ、長い期間そのまま

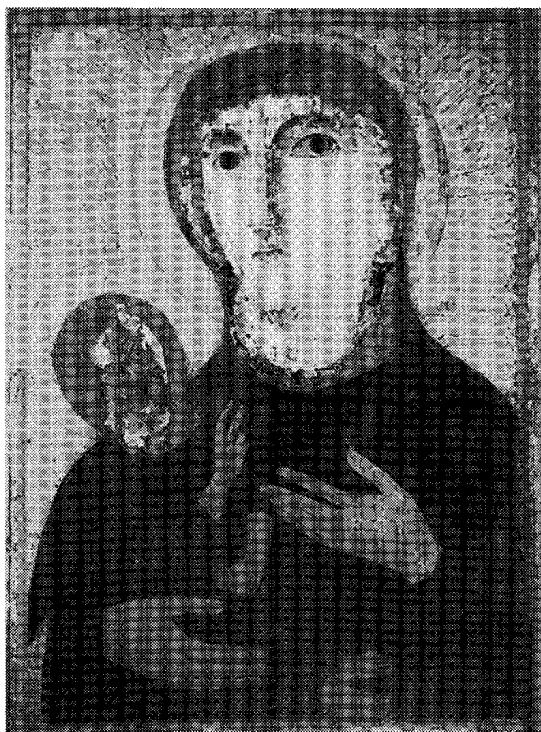


図1 聖母子イコン 6世紀 ローマ サンタ・マリア・ノーヴァ
(別名サンタ・フランチェスカ・ロマーナ) 聖堂

ローマの聖母子イコンの起源について

の状態にあったが²⁷、後に挿のようなもので聖母子の顔部分のみが切り離され、東方起源の貴重な木板（杉科 *Dalbergia latifolia*）に貼り付けられた。13世紀頃には、キャンバスにテンペラで描かれた聖母子の顔が上に貼り付けられ、当時のものと思われる銘文によって、この像が「ギリシアのトロイの出である *Troade de Greciae partibus*」との由来が記された。16世紀には聖母子の後輪と胸の部分が描き加えられ、背景に金箔が施された。さらに1805年に上手いとはいえない修復が行なわれたが²⁸、1950年の修復でそれらが洗浄された結果、下から最古の聖母子の顔が発見され話題となった²⁹。

こうした経緯のため、現在のイコン（132×98cm）にはオリジナルの聖母子の顔と後世の加筆が混在し、全体のバランスを欠いている。しかし、オリジナル部分に目を向けると、聖母の顔だけで縦53cm横幅41cmにも達し、当初の巨大な寸法が偲ばれる。現存するローマ・イコンの中で最大となるこの聖母は、キリストの方へわずかに傾けられた4分の3面観で表され、首にひねりが生じている。こちらを見つめる大きな目は小さな口と対照的で、確固とした存在感をたたえ、鼻筋の片側のみに配された陰影が厳格なリズムを



図2 女性の肖像 3世紀 ファイユーム出土 フィレンツェ 考古学博物館

生みだす。エンコースティックによる豊かな色彩のモデリングは水晶のように滑らかな透明感を現在にまで伝えている。

一方、幼児キリストの顔は保存状態が思わしくないが、見上げるような角度で聖母に顔を向け、後方のニンブスには十字の痕跡が確認できる。両者の顔の関係から、キリストが聖母の右腕（画面の左側）に抱かれていたことは明らかである。このイコンの制作年代については諸説あるが³⁰、技法および様式が古代末期のエジプトで制作された死者の肖像（図2）に通じる古い特徴を示し、さらにこれを最初に祀っていたサンタ・マリア・アンティークア聖堂が6世紀後半には確かに存在していたことから³¹、おそらく聖堂と同じ6世紀頃のものと考えられる。

次に挙げるイコンは、609年5月13日、教皇ボニファティウス4世（在位608–615年）が、聖母とすべての殉教者に捧げて、パンテオン神殿をキリスト



図3 パンテオンの聖母子 609年頃 ローマ サンタ・マリア・アド・マルティレス聖堂

ト教の聖堂(サンタ・マリア・アド・マルティレス聖堂)へと改めたときに、そこに祀られたものである(図3)³²。通称《パンテオンの聖母》と呼ばれる聖母子イコンは、献堂に際して、聖母がこのイコンとともに聖堂に入り、そこにとどまると見なされた、聖堂を記念するイコンである³³。当時のビザンティン世界では、聖母のイコンは聖遺物と共に祀られることによって、その聖堂を記念することが一般的であったことから、聖遺物を持たないローマの聖母教会にとって、イコンが果たした重要性は特筆に値する。事実、ベルテッリはこのイコン自体が聖遺物の役割(一種のご神体ともいえようか)を果たしたと考察している³⁴。

現在のイコンの保存状態は良好とはいはず、支持体として用いられた榆の木のパネル(100×48cm)は、バロック期のタベルナクルムに収める際に切断されている。しかし、その上に描かれた聖母子には、母と子の人間的結びつきを表現するきわめて洗練された手法が認められる。夢見るような眼差しの聖母はわが子を左手に抱きながら、その体をわずかにそちらへ傾けている。彼女に身を寄せるキリストは威厳に満ちた様子で、顔と視線をわれわれに向いている。母の静かな瞑想は子の活動性と対照的で、その調和に観者は惹きつけられる。実際に、彼らの存在は信徒たちを巻き込むものであり、聖母は信徒たちのためにキリストに赦しを請い、キリストはその祈りに応えるのである。さらに興味深い特徴が、キリストの膝に触れている聖母の右手に認められる。それは神の庇護を請い、執り成しの働きをする重要なモチーフであるがゆえに金で覆われていた。

3番目の聖母子イコンは、サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ聖堂に祀られたものである(図4)³⁵。この聖堂の起源は、先のサンタ・マリア・アンティークア聖堂よりかなり古くにさかのぼるが、このイコン自体は献堂当初からそこにあったものではない³⁶。《クレメンツアの聖母》と呼ばれるイコンの大きさは縦164cm横116cmで、キャンヴァスにエンコースティックで描かれた聖母の足もとには、絵具の剥落が著しいが、イコンの寄進者である教皇ヨハネス7世(在位705-707年)の膝まずく姿が確認できる³⁷。

豪華な衣装と王冠を身につけた聖母は、「マリア・レギーナ」型といわれる女王としてのマリアを表わしたもので、それはローマを中心に西方世界で

好まれた主題である³⁸。威厳に満ちた女王マリアは、長めの上半身を垂直に伸ばして大きなクッションのある玉座に座り、右手に十字架付き錫杖を握り³⁹、左手で膝に座るイエスを支える。この勇壮な聖母の姿は、キリスト教化されたローマ帝国の皇帝が十字架を肩にして、それを公示する身振りを踏襲しており、皇帝美術に端を発するものである⁴⁰。彼女の両脇後方で、やや斜めに身を構える二人の天使のポーズは、イコンの上縁に配された銘文の一節「主天使らは畏れに捉われ *stupentes angelorum principes*」⁴¹を巧みに喚起し、それらの動きは聖母子の厳格な不動性を対照的に際立たせている。

次にサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に目を移そう。ここには
《ローマ市民の救い》と呼ばれる聖母子イコンが祀られている（図5）⁴²。文献によれば、これはラテラノ宮殿の教皇用礼拝堂（サンクタ・サンクトールム）にあった《アケロピータ》（ギリシア語のアケイロポイエートス「人の手によって作られたのではない」のラテン訳）と呼ばれるキリスト・イコンと共に、中世ローマで最も崇敬を集めたものであり、聖母の存命中に使徒

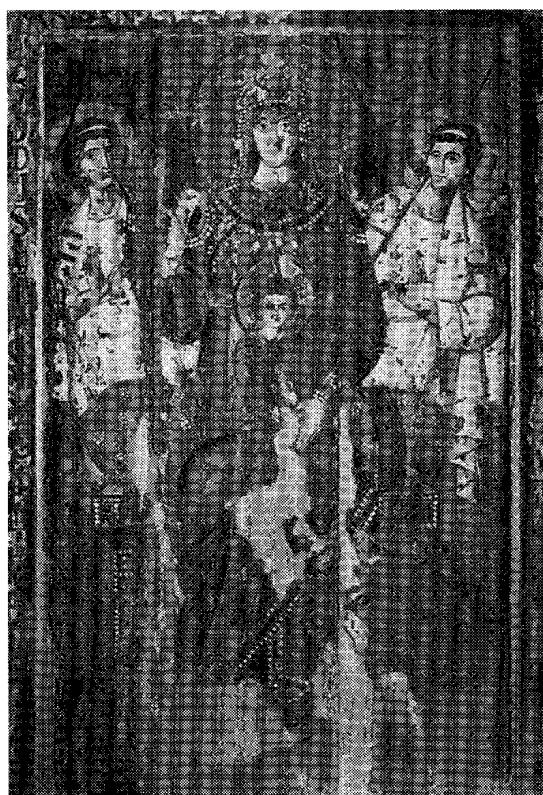


図4 クレメンツィアの聖母子 705～707年
ローマ サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ聖堂

ローマの聖母子イコンの起源について

ルカが描いたという神聖な起源を持っている。後に詳述することとなるが、聖母被昇天祭には、このキリスト像が祭礼行列に掲げられ、ローマの各聖堂に伝わる由緒ある聖母イコンを訪ねた後に、最終到着地であるサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂において、このイコンと合流したらしい。

現存する聖母子イコンは糸杉材のパネル(117×79cm)に描かれているが、さまざまな時代の絵画層のモンタージュで構成されているために、制作年代の同定が困難である。半身立像の聖母が幼児キリストを左手に抱く図像は、《パンテオンの聖母》と同じく「ホデゲトリア型」に属すものである。しかし、《ローマ市民の救い》の聖母が、より自然なコントラポストの仕草でキリストと向かい合い、視線を画面の外へと投げかけているのと比較すると、パンテオンの作例では、聖母は赦しを請うためにキリストへの従属を示しているようにも見え、母子の身体的な結びつきは平面的なものとなっている。さらに、《ローマ市民の救い》イコンの最下層(最古)に属する幼児キリスト



図5 聖母子イコン（通称「ローマ市民の救い」）6世紀?
ローマ サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂

トの右手部分が、古代風のモデリング表現をとどめている点などを総合して、ベルティングはこの聖母子像を中世ではなく、古代絵画の趣きを伝えるものであると結論づけた⁴³。

一方、アンダロロによると、聖母がその両手を重ね合わせる図像的特徴は珍しいものであるが、サンタ・マリア・アンティークア聖堂に残る7世紀の壁画にも同じ図像が認められることから、両者はそれ以前にあった共通の聖母子タイプを踏襲していると考えられる⁴⁴。以上のことと踏まえると、

《ローマ市民の救い》のオリジナルはかなり古い時代に年代づけられ、場合によってはパンテオンの場合と同じ様に、教会の献堂にさかのぼるものかもしれない。

これまで見てきた聖母子イコンは、ローマで聖母に捧げられた最も重要な4つの教会——サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂、サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ聖堂、サンタ・マリア・アンティークア聖堂、サンタ・マリア・アド・マルティレス聖堂(パンテオン)——に祀られていたものだった。これらと並んで、中世のローマで名声を博したもう1つのイコンは、《サン・シストの聖母》と呼ばれ、「早い時代に東方からもたらされた由緒正しい」ものと考えられている(図6)⁴⁵。このイコンは所蔵先を転々としたが、現在はサンタ・マリア・デル・ロザリオ聖堂付設修道院に保管されている⁴⁶。木製パネル(71.5×42.5cm)にエンコースティック技法を用いたこの作品は、ローマのイコン群の中で、はじめから金地背景として描かれた唯一のものである。聖母像は幼児キリストを伴わず、両手を画面の外にいる誰かへと向けている。これは「執り成しの聖母」(ハギオソリティッサ)⁴⁷と呼ばれるタイプで、一方の手を祈りを請うキリストへ、もう一方を信徒たちに向けることで、仲介者としての役割を視覚的に表わしたものである。彼女の両手は《パンテオンの聖母》と同じように金の覆いが被されて、信徒のために赦しを請う、執り成しの力が示されていた。聖母の顔は、鮮やかな色彩によって豊かな量感を示す卵型で、暗いベールからはっきりとその輪郭を浮かび上がらせる。制作年代については諸説あり、いまだ解決を見ていないものの、近年では7～8世紀と考えられている⁴⁸。

ローマに残る聖母子イコンを見渡して言えることは、これらが初期の段階

ローマの聖母子イコンの起源について

でいかに多くのイメージの系譜を有していたかという点である。本稿の前半のイコンの起源に関する考察で、古代のさまざまな伝統とジャンルから派生した諸形式を受け継いでイコンが生成されたことについて触れたが、ローマの聖母子イコンはまさにそれを体現しているかのようである。5点の聖母子イコンは、図像のタイプはもとより、様式、サイズ、技法など、それぞれ異なる特徴を示し、後の時代で一般的な原型とコピーの関係を思わせる類似作品は1つも見あたらない。これら板絵に加え、さらにサンタ・マリア・アンティークア聖堂壁画に残された、イコンを思わせる数々の奉獻画を思い起こせば、そのヴァリエーションの多様さに驚くばかりである。

それゆえ今後の研究方法としては、ローマ・イコンを1つのグループとして扱うのではなく、個々の作品を綿密に考証し、それぞれが内包する問題を個別に解き明かしていくことが重要となるだろう。こうした視野に立つ



図6 サン・シストの聖母 7~8世紀?
ローマ サンタ・マリア・デル・ロザリオ聖堂

て、本稿ではまず聖母子イコンと異教神像との関係について考えてみたい。

5 異教の女神から聖母子像へ

聖母子像は、これまでの研究においても異教時代からキリスト教時代へのイメージの連續性を示す顕著な例として取り上げられてきた。例えば、聖母子像の最古の例として3世紀半ばに年代づけられる、プリシッラのカタコンベの「授乳の聖母」(図7)⁴⁹では、ヴェールを被った聖母が両腕で幼児を抱きかかえて授乳する姿が表され、幼児はしっかりと母の胸にしがみついている。これを、エジプトの女神イシスが幼児ホルスに授乳する姿(図8)と比較すると、両者は識別が困難なほど似通っている⁵⁰。このイシス女神だけでなく、古代オリエントのイシュタル、ギリシアのアルテミスなど東方起源の異教女神は大地母神とよばれる豊穣の観念と結びつき、彼女たちへの信仰とそのイメージが、聖母マリア崇拜になんらかの影響を与えたことはまず間違いないであろう。

事実、都市ローマにおいてもイシス信仰は1世紀後半には導入され、数々の神殿が建設された⁵¹。これらの神殿は、テオドシウス帝(在位379-395



図7 預言者と授乳の聖母子 3世紀前
ローマ プリシッラのカタコンベ アレナリウムの通廊

ローマの聖母子イコンの起源について

年) が391年に公私ともに古代神崇拝を禁止し、そのすべてが閉鎖されるまで公に重要な位置を占めていた。またそれらの信仰は、その後も長く息をとどめ、例えば449年のポレミウス・シルヴィウスの暦では、ローマにおける異教神たちの重要な祝日がすべて記録されている⁵²。サンタ・マリア・ソープラ・ミネルヴァ聖堂の例を見ても明らかなように、それら異教の女神の神殿跡に聖母マリアの聖堂が建設されることも珍しいことではなかった。

加えて、《パンテオンの聖母》と《サン・シストの聖母》に共通する「金で覆われたマリアの手」も、異教時代の伝統にさかのぼるものである⁵³。医療の神アエスクラピウス⁵⁴は、その手で奇跡を起こし病人を治癒したために、彼の手はしばしば金箔で覆われて、その働きを示していた⁵⁵。古代において、彫像に金箔を被せることは、しばしば救いのために感謝を捧げる方法であった。

異教の彫像から、キリスト教イコンへという移行に関しては、マッシュウズが興味深い考察を行っている。彼によれば、異教時代の神像はすべてが



図8 授乳のイシス 1世紀 ヘルクラネウム出土 エルコラノ古代遺物館

3次元の丸彫り彫刻であったわけではなく、異教イコンとでも呼ぶべき板絵が広く用いられていたらしい。彼は、これまでほとんど注目されなかつたその現存作品をいくつも報告した⁵⁶。確かに、古文献のなかにも、そのような神像を描いた板絵の記述は認められるし⁵⁷、また、ポンペイ出土の1世紀の壁画には、ディオニソスあるいはプリアモスと思われる有髭の男性胸像を配したヘルメス柱像（頭像または胸像を上部につけた四面の柱体の記念碑）を前にして、それを板絵に描いている女流画家の優美な姿も残されている（図9）⁵⁸。このような板絵に描かれた異教神たちは、後のキリスト教イコンを直接的に想起させるものである。

加えて筆者が注目するのは、聖母に関連するローマの祭礼行列である。『歴代教皇録（リーベル・ポンティフィカリス）』には、教皇の先導のもとで行なわれた祭礼行列の記録が残されているが、マリア関連の祭礼行列がはじめて登場するのは、先に触れた聖母の祝祭日を導入した教皇セルギウス1世によるものである。そこでは、人々の行列はフォルムにあるサンタドリアーノ聖堂（旧クーリア・ユリア）から出発し、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に到着した。また教皇ステファヌス2世（在位752–757年）の



図9 板絵を制作する女性画家 50~79年 ポンペイ出土 ナポリ国立考古学博物館

ローマの聖母子イコンの起源について

時代には、ランゴバルドの攻撃から町の守護を祈願するため、ラテラノ宮の教皇専用礼拝堂にあったキリスト・イコンが行列に掲げられ、人々はそれを肩に担いで、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂へと向かった。さらに、9世紀の教皇レオ4世（在位847–855年）の伝記では行列に関するより詳細な記述が見られ、それによると、8月15日の聖母被昇天祭には「慣例どおりに」ラテラノ宮のキリスト・イコンがサンタドリアーノ聖堂からサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂へと運ばれていった当時の様子が表わされている。その後の記録もまとめると、8月15日の聖母被昇天祭には、ラテラノ宮にあったキリスト・イコンが教皇に先導された行列に掲げられ、ローマのいくつかの教会堂に伝わる聖母子イコンを訪れた後、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に入り、そこにあった《ローマ市民の救い》の聖母子イコンがキリストを迎えたらしい。つまり、行列に掲げられたのはキリスト・イコンであったが、聖母子イコンは聖堂でそれと合流をする重要な役割を担った。ピーター・ブラウンによれば、イコンの機能は単なる宗教的観想の対象ではなく、危機に瀕したある社会の集団心理に訴えかけたり、宗教上の対立に際し優位を表明したり、または魔除け、治癒、護身といった即物的な祈願の拠り所でもあった⁵⁹。

筆者の知る限り、ローマにおけるイコン祭礼行列に関する記録は教皇が行ったものに限られている。しかし、記録にないとの理由でその他の祭礼行列が存在しなかったと考えるのは早計であろう。当時の状況を考えるならば、祭礼行列には教区教会の司祭を中心とするものや、場合によってもっと小さな共同体の主催で行われるものも数多くあったかもしれない。元来、神像を掲げた祭礼行列とは、古代世界全体に広く普及していた民衆的な性格のものであり⁶⁰、皇帝や教皇といった高位の人物の参加は必ずしも必要ではなかった。

古代におけるこの種の祭礼の様子は、ポンペイの壁画に鮮やかに描きだされている（図10）⁶¹。ここではライオンを両脇に従えた豊穣の母神キュベレの像が、アエディクラ（小祠）に収められたアルカイックなディオニュソス像のもとを訪れている場面が表される。画面右のキュベレ像は担がれるために台座に載せられ、その傍らには特別な胸当てをつけた運搬人が控えてい

る。さらにその横には儀式を司る神官らの姿も認められる⁶²。ある神像が、別の神像を訪れるという祭礼の形式においても、このポンペイの壁画は、先述のローマで行なわれた聖母子イコンを訪れるキリスト・イコンの祭礼行列と完全にパラレルな様相を呈している。

このローマ時代の壁画を、時代はかなり下るが12世紀中頃に制作された、ミラノのサンタ・マリア・ベルトラデ聖堂由来の浮彫と比較してみよう（図11）⁶³。この浮彫は、毎年2月2日にミラノのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂からサンタ・マリア・ベルトラデ聖堂まで行なわれた当時の行列の様子を表わしたものである。大聖堂に保存されていた聖母子イコンは、2人の助祭の肩に担がれ、その後ろには十字架を持った他の聖職者や司教、大聖堂の長老たちが続いている。両者の神像が、ともに切り妻状の背景に置かれているのは偶然であろうか。いずれにせよ、聖母子像が置かれた神輿の形や行列の構成など、ポンペイ壁画から1000年以上の時を経て、神像を掲げた祭列がいかに長い生命を保ち続けたかが見てとれる。

現在でも、ローマのトラステヴェレ地区では、7月に「ノアントリ（我ら）の祭り」が祝われ、サンタガタ聖堂にある聖母像《カルミネの聖母》が行列とともにトラステヴェレを練り歩き、サン・クリソゴノ聖堂にいたつてから、そこに8日間留まり、もとの場所に帰るという祭儀が執り行なわ



図10 キュベレ女神の祭礼行列場面 50~79年 ポンペイ アボンダンツア通り

ローマの聖母子イコンの起源について

れている。この起源は1226年にさかのぼるそうであるが、聖母子像をともなう祭礼行列は古き時代から民衆のあいだでさまざまに繰り広げられていたのではないだろうか。

最後に、これまで論じてきた異教の祭礼行列からキリスト教のものへの変容を、内面的に伝える初代ラテン教父のテキストを挙げておこう。最初のラテン教父といわれる、カルタゴ人テルトゥリアヌス（160年以前～220年以降）は、『偶像礼拝について』⁶⁴のなかで、偶像を製作する者はキリスト教徒たりえない、と厳しく非難しているが、別の著作『魂の証言について』⁶⁵では1つの興味深い視点が認められる。そこでは「生まれながらにキリスト教に属する魂」が、法廷での証人のように反対尋問され、神の存在について語られていくが、異教の神々の祭礼行列に参加し、神殿の中で祈る「魂」について、以下のように述べられる。

……しばしばあなた〔魂〕がケレス⁶⁶の髪リボンで〔頭を〕飾り、またサトゥルヌス⁶⁷の真紅のマントと、女神イシス⁶⁸の亜麻布を身にまとうときに、ひとことで言えば、同じ神殿の中であなたが裁き手としての神に嘆願するときに、それ（あなたがキリスト教徒であること）が言えるのである。あなたはアエスクラピウス⁶⁹の像の下に立ち、銅像の姿の女神ユノ⁷⁰を讃え、ミネルウア⁷¹の黒ずんだ兜を被り、臨席する〔他の〕神々の誰をも証人としない。^{ダイモーン}……おお、真理の証言よ。それ（魂の証言）はまさに諸靈の中にあって、キリスト教徒たちのための証人の役割をはたすのである。

ここにおいて、異教の風習である神々の祭列に加わり、異教神殿で神の像に

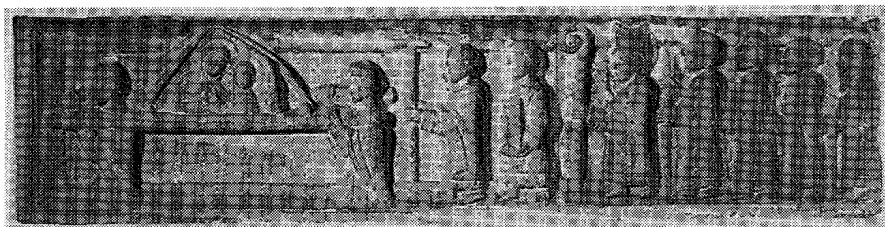


図11 聖母子イコンの祭礼行列場面 12世紀後半
ミラノ カステッロ・スフォルツェスコ美術館

祈る魂は非難されることなく、その行いにキリスト教の神への確信が見出される。佐藤吉昭氏によれば、ここで言及されるケレス、サトウルヌス、イシスの3種の異教祭礼用衣装は、単なる異教祭儀の紹介ではなく、おそらく福音書のキリスト受難で語られる茨の冠、着せられた紫の服、復活後の墓に残された亜麻布に対応し、自然の魂が異教祭礼を行いながら、イエスの十字架の犠牲を象徴的に理解していたことを示そうとしたらしい⁷²。さらに続く、魂が祈る異教の偶像たちについても、テルトゥリアヌス自身が別の箇所で「折に触れてあなたが彼らを神々と呼ぶときに、あなたは外来の、いうなれば借用された表現を用いているように思われる」と論じ、異教の神々の姿にキリスト教的な本質を読み取ろうとしている⁷³。

テルトゥリアヌスがこれを執筆した3世紀頃は、まさにキリスト教徒がさまざまな異教の造形表現を借り受けて、キリスト教美術を創りはじめた時代であり、先に述べたイシス女神と同じ容貌の最古の聖母子像がカタコンベの壁に描かれたのも、この時代であった。

6 結　　び

キリスト教徒がどのように崇敬を対象とする聖画像を受け入れたのか、そしてそれはいつ頃であったのかという問いは、神学、宗教史、政治史などさまざまな観点から解釈が試みられている。事実、聖母子イコンの生成についても、エフェソス公会議におけるマリアの神性の確認を契機と考える説や、ローマがビザンティン帝国の一部となることで生じた活発な東西交流の歴史、または巡礼の拡大によりシリア・パレスティナから伝えられた聖遺物の数々、あるいはイコノクラスマに際しローマ教会が示した画像擁護の立場など、さまざまな外的要因からイコン発展の過程を解き明かそうとする試みがなされてきた。しかし、古代末期のローマにおいて、すでにイコン崇拜の萌芽は随所に認められていたようである。本稿では聖母子イコンの源泉として、当時のローマ社会に溶け込んでいた神殿に安置され奇跡を行う神像や、異教の祭列に掲げられた神像など、限られたジャンルを考察するにとどまつたが、これ以外にも家庭内の守り神としての女神像や、先祖崇拜から生じた

故人の肖像(母と子という家庭的な主題)からもなんらかのインスピレーションを受けたのではないだろうか。つまり、イコンを取り巻く問題とは、古代末期という過渡期の社会で重層的なレベルに保持されていた、あらゆるイメージの信仰にまつわるものなのである。

これらの考察を踏まえて、ローマに現存する聖母子イコンそれぞれの個性的な特徴を思うと、たとえそのなかの一部が東方からの渡来品であったとしても、画像崇拜のさまざまな慣わしは、社会内部の必要性から自発的に生じたものではないかと考えずにはいられない。また聖母子イコンの成立年代については、今後さらなる検討が必要とされるが、聖母子の図像がはじめてキリスト教美術に登場した3世紀半ばから、それほど遠い時代ではなかったようと思われる。

注)

- 1 イコノクラスマの概説については以下の文献参照。P. Brown, *A Dark Age Crisis: Aspects of the Iconoclastic Controversy*, 『English Historical Review』, 88, 1973, pp. 1-34; D. Stein, *Der Beginn des byzantinischen Bilderstreites und seine Entwicklung bis in die 40er Jahre des 8. Jahrhunderts*, München, 1980; *La legittimità del culto delle icone. Oriente e Occidente riaffermato insieme la fede cristiana*, a cura di G. Distante, Bari, 1988. M.D.ノウルズほか『キリスト教史／3 中世キリスト教の成立』上智大学中世思想研究所 編訳／監修（平凡社ライブラリー174）平凡社 1996、167-238頁。
- 2 イコノ克拉スマの論争とそこで再編成された画像論については以下の文献に詳しい。J. Sahas, *Icon and Logos: Sources in Eighth-Century Iconoclasm*, Toronto, 1986; J. Pelikan, *Imago dei. The Byzantine Apologia for Icons (Bollingen Series 35, 36)*, Princeton 1990. 辻佐保子「ビザンティン世界の表象世界——序にかえて」『ビザンティン美術の表象世界』岩波書店 1993、3-39頁。
- 3 益田朋幸「イコンの『美学』」『エーゲ海学会誌』、第九号、1995（『描かれた時間』論創社 2001、に再録）

- 4 当時のローマの歴史的状況については以下の文献参照。O. Bertolini, *Roma di fronte a Bizanzio e ai Longobardi*, Bologna, 1941; M.V. Anastos, *Leo III's edict against the images in the year 726-27 and Italo-Byzantine relations between 726 and 730*, 《Byzantinische Forschung》, 3, 1968, pp. 5–41.
- 5 J. Lafontaine-Dosogne, *Icona*, in *Enciclopedia dell'arte medievale*, a cura di A. M. Romanini, vol. 7, Roma, 1996, pp. 263–276.
- 6 6世紀後半、7世紀初頭から急激に増加しはじめるイコン制作ないし崇拜にまつわる文献の記述、あるいはイコン形式を反映した奉納画形式の単独場面（モザイクないし壁画、時には石棺浮彫）の登場について、さまざまな側面から興味深い考察がなされている。A. Grabar, *Martyrium. Recherches sur le culte des reliques et l'art chrétien antique*, Paris, 1943–46, vol. 2, p. 343 e sgg., 357; E. Kitzinger, *The Cult of Images in the Age before Iconoclasm*, 《Dumbarton Oaks Papers》 8, 1954, pp. 83–150, p. 115 e sgg.; A. Grabar, *L'Iconoclasme byzantin: Dossier archéologique*, Paris, 1957, pp. 82–84; P. Brown, *Society and Holy in late antiquity*, California, 1982, p. 251 e sgg.; A. Cameron, *The Theotokos in Sixth-Century Constantinople: a City Finds its Symbol*, 《Journal of Theological Studies》, 29, 1978, pp. 79–108 e ID, *Images of Authority: Élites and Icons in Late Sixth Century Byzantium*, 《Past and Present》, 84, 1979, pp. 3–25; H. Belting, *Likeness and Presence: A History of Image before the Era of Art*, trad. E. Jephcott, Chicago, 1994.
- 7 E. Kitzinger, 1954; A. Grabar, 1957; H. Belting, 1994 pp. 102–114; P. Magdalino, *The History of the Future and its Uses: Prophecy, Policy and Propaganda*, a cura di R. Beaton/C. Roueché, in *The Making of Byzantine History: Studies dedicated to Donald M. Nicol*, London, 1993, pp. 3–33; L. Brubaker, *Icons before Iconoclasm?*, in *Morfologie sociali e culturali in Europa fra tarda antichità e alto medioevo*, Spoleto, 1998, pp. 1215–1254.
- 8 イコンの源泉を、古代の奇跡を行う異教神像のコンテキストでとらえた初期研究にE. von Dobschütz, *Christusbilder. Untersuchungen zur christlichen Legende, Text und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur*, Leipzig, 1899がある。その他、異教神像との関係を論じたものとして以下の文献参照。H. Belting, 1994, pp. 36–40; T. F. Mathews, *The*

Emperor and Icon, 《Acta ad Archaeologiam et Artivm Historiam Pertinentia》, 15 (N.S. 1), 2001, pp. 163–177.

- 9 一般的に4世紀にはイコン崇拜は禁じられていたと考えられている。その根拠として、研究者にしばしば引用されるのが、古代ローマの神学者、歴史家であるカエサレアのエウセビオス（260～339/40年）が皇后コンスタンティア・アウグスタ（337年以前没）に宛てて書いた、キリストのイコンの神学的有効性を否定する書簡である。その中で彼は「このようなもの（聖画像）は世界中の教会から追放され、締め出されており、このような実践（聖画像を崇拜すること）が、われわれに許されないことは、周知の知るところではなかろうか」と当時の状況を伝えている。*Patrologie cursus completes, Series graeca*, a cura di J. P. Migne, Paris (以下P.G.), 20, p. 1545 e sgg. 筆者は以下の英訳参照。C. Mango, *The Art of the Byzantine Empire, 312–1453*, Toronto, 1972, 16–18 (reprint 1986). その他にも、4世紀末のサラミスのエピファニオスやアウグスティヌスも聖画崇拜者に対して否定的見解を示している。
- 10 T. F. Mathews, 2001.
- 11 E. Hennecke/ W. Schneemelcher, *New Testament Apocrypha*, trad. R. Wilson, Philadelphia, 1964, vol. 2, pp. 188–259. この原典は、不思議にも従来の研究で黙ってきたが、近年以下の研究で注目を集めた。S. Sande, *The Icon and its Origin in Graeco-Roman Portraiture*, a cura di L. Ryden/J. Rosenquist, in *Aspects of Late Antiquity and Early Byzantium (Swedish Research Instituto in Istanbul Transactions, 4)*, Stockholm, 1993, pp. 75–84. 彼はキリスト・イコンの起源を古代の肖像に求めている。
- 12 イコン崇拜がまずプライベートな空間で始まり、後に教会で許可されるようになり、最終的には国家全体で受け入れられたという見解は、ベルティングの著作においても明確に語られているが、その具体的な発展年代について言及されていない。H. Belting, 1994, 26, 40.
- 13 本稿注9では、エウセビウスの論を紹介し、4世紀の教会が示したイコン崇拜への嫌悪について述べたが、彼の別の著作『教会史』では、異教社会とキリスト教社会の混在から生じる、イコン崇拜のエピソードが以下のように伝えられている。

この像はイエスを模したものであると言われる。……私たち自身の目でそれを見ている。かつてわたしたちの救い主のなされたよき業をうけ

た異教徒がそれら〔の像〕をつくったことは、何も驚くべきことではない。というのも、その方の使徒たちや、パウロ、ペテロ、そしてキリストご自身の似姿の色彩画も残されており……。昔の人たちが自分たちの間の異教の習慣にしたがってそのような仕方でそれらの似姿を救い主として無条件で崇める習慣があったことはあり得ることである。

(Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, VII, 18; エウセビオス『教会史』第3巻、秦剛平訳、山本書店、1988年、37頁。) この記述を見てもイコンはかなり早い時代から信徒の間に普及していたと考えられる。

- 14 C. Baltoyanni, *The Mother of God in Portable Icons*, in *Mother of God; Representations of the Virgin in Byzantine Art*, a cura di M. Vassilaki, catalogo della mostra, Milano, 2000, pp. 139–153.
- 15 P.G. 50, 519D.
- 16 ブラケルナイ聖堂は、9世紀のテオドロス・レクトールの記述によると、アルカディウス帝の娘、マルキアヌス帝の皇妃プルケリアにより451年に献堂され、エルサレムのゲッセマニの教会で発見された聖母の被布（マフォリオンまたはスケペー）を櫃（ソロス）に納めて祀った。J. Ebersolt, *Constantinople, Recueil d'études d'archéologie et d'histoire*, Paris, 1951, pp. 44–53.
- 17 カルコプラティア聖堂は、上述のテオドロス・レクトールの記述に従うと、テオドシウス2世の治世の終わり頃、皇妹プルケリアによりハギア・ソフィア大聖堂付近のユダヤ教会跡に建設され、聖櫃に納めた聖母の帶（ゾーネ）を祀ったと伝えられる。J. Ebersolt, 1951, pp. 54–60.
- 18 ホデゴス聖堂は、上述のテオドロス・レクトールの記述に従うと、テオドシウス2世の皇妃エウドキアがエルサレムで入手したイコンを首都の義妹プルケリアに送り、後者がホデゴス聖堂を建設したと伝えられる。
- 19 14世紀のニケフォロス・カリストスの記述による。P. G. 146, 1061. A; 147, 44, A.; E. von Dobschütz, 1899, appendixes pp. 269–271.
- 20 H. Belting, 1994, pp. 73–77.
- 21 辻佐保子「教皇庁と美術」『西欧初期中世の美術』（世界美術大全集西洋編第7巻）小学館、1997年、199頁。
- 22 ローマへの聖母の祝日導入については以下の文献参照。T. Klauser, *Rom und der Kult der Gottesmutter Maria*, 《Jahrbuch für Antike und Christentum》, 15, 1972, p. 126; *Le Liber Pontificalis*, Text, introduction et

- commentaire, a cura di L. Duchesne, Paris, 1886, vol. 1, p. 376; *The Books of Pontiffs (Liber Pontificalis): The ancient biographies of the first ninety roman bishops to AD 715*, trad. R. Davis, Liverpool, 1989, p. 87.
- 23 H. Belting, 1994, p. 63.
- 24 初期の主な研究については、以下の文献参照。E. Kitzinger, *On Some Icons of the Seventh Century*, in *Late Classical and Medieval Studies in Honor of A. M. Friend, Jr.*, Princeton, 1955, pp. 132–(reprint *The Art of Byzantium and the Medieval West. Selected Studies*. Ed. W.E. Kleinbauer, Indiana University Press, 1976); C. Bertelli, *L'immagine del 'Monasterium Tempuli' dopo il restauro*, 《Archivum Fratrum Praedicatorum》, 31, 1961a, pp. 82–111, e ID., *La Madonna del Pantheon*, 《Bollettino d'arte》, 4, 46, 1961b, pp. 24–32, e ID., *La Madonna di S. Maria in Trastevere: Storia–Iconografia–Stile di un dipinto ottavo secolo*, Roma, 1961c, e ID., *Icone di Roma. In Stil und Überlieferung in der Kunst des Abendlandes*, in *Akten des 21. Internationalen Kunsthistoriker-Kongresses* 1, Bonn, 1967, pp. 100, e ID., *Storia e vicende dell'immagine edessena a S. Silvestro a Capite a Roma*, 《Paragone》, 217 (n.s., 37): pp. 3–37; D. H. Wright, *The Earliest Icons in Rome*, 《Arts Magazine》, 38, 1963, pp. 24–.
- 25 H. Belting, 1994. その他の関連文献として以下のものがある。H. Belting, *Icons and roman society in the twelfth century*, in *Italian church decoration of the middle ages and early Renaissance*, Villa Spelman Colloquia, 1, 1989, pp. 27–41; G. Wolf, *Salus Populi Romani: Die Geschichte römischer Kultbilder im Mittelalter*, Weinheim, 1990. 鼓みどり「マリア・レギナからキリストの花嫁へ—西欧中世における聖母の勝利図像について」『女神—聖と性の人類学』平凡社1998、259–298頁。
- 26 主要文献は以下の通り。E. Kitzinger, 1955; C. Bertelli, *Il restauro*, 《Bollettino dell'Istituto Centrale del Restauro》, 41–44, 1964, pp. 15–189; M. Andaloro, *La datazione della tavola di S. Maria in Trastevere*, 《Rivista dell'Istituto Nazionale d'Archeologia e storia dell'arte》, 19–20, 1972–1973, pp. 139–215; P. Amato, *De vera effigie Mariae: Antiche icone romane*, Milano–Roma, 1988, pp. 18–24; M. Guarducci, *La più antica icona di Maria: un prodigioso vincolo fra Oriente e Occidente*, Roma, 1989; G. Gharib, *Le icone mariae*, Roma, 1987, pp. 109–111; H. Belting, 1994; M. Andaloro,

- Theotokos di S. Maria Nova (Imago antiqua)*, in *Aurea Roma: dalla città pagana alla città cristiana*, a cura di S. Ensoli/E. La Rocca, catalogo della mostra, 2000, pp. 374–375.
- 27 グアルドウッチは、「犠の状態で」“allo stato di stendardo”と記述しているが、残された聖母子の顔の断片的部分から、用途までは推測し難い。M. Guarducci, 1989, p. 15
- 28 この修復は1805年Petrus Tedeschiなる人物によって行なわれ、彼はそこに聖母への祈りも書き加えた。
- 29 修復にともなう状況の記述は、以下の文献に詳しい。M. Guarducci, 1989, pp. 13–16.
- 30 推定された制作年代には5世紀から11世紀までの開きがあるが、近年では6～7世紀という編年が一般的である。
- 31 R. Krautheimer, *Corpus basilicarum christianarum Romae*, Roma, 1961, vol. 2, pp. 254–55, 264.
- 32 すべての神々の神殿（パンテオン）から、すべての殉教者の教会堂へという理念上の移行は明らかであるが、殉教者でない聖母をその名に冠した理由は定かではない。ただしベルティングはパンテオンの円形堂建築が、ビザンティン世界において聖母に捧げられた教会堂のプラン（それは聖遺物を有するものであったが）と呼応していた可能性を示唆している。H. Belting, 1994, 64.
- 33 主要文献は以下の通り。C. Bertelli, 1961b; M. Andaloro, 1972–1973, pp. 190–192; P. Amato, 1988, pp. 34–37; H. Belting, 1994, pp. 121–124; M. Andaloro, *Icona con l'Hodighitria*, in *Aurea Roma*, 2000, pp. 375–376.
- 34 C. Bertelli, 1961b, pp. 28–29.
- 35 主要文献は以下の通り。C. Bertelli, 1961c; E. Russo, *L'affresco di Turtura nel cimitero di Commodilla, l'icona di S. Maria in Trastevere e le più antiche feste della Madonna a Roma*, 『Bollettino dell'Istituto storico Italiano per medio evo e Archivio Muratoriano』, 88, 1979, pp. 35–85; C. Bertelli, *La pittura medievale a Roma e nel Lazio*, in *La pittura in Italia L'Altomedioevo*, Milano, 1994, pp. 206–242; H. Belting, 1994; M. Andaloro, *Icona della Madonna della Clemenza*, in *Aurea Roma*, 2000, pp. 376.
- 36 しかしサンタ・マリア・イン・トラステヴェレ聖堂には、それ以前から「自らその姿をなした—per se facta est」奇跡の聖母イコンが祀られていたら

しい。「人の手によって作られたのではない—*acheiropoietos*」このイコンの記述は、640年頃の巡礼記や8世紀にローマで編纂されたギリシャ語写本に見られる。C. Barber, *Early Representation of the Mother of God*, in *Mother of God; Representations of the Virgin in Byzantine Art*, 2000, p. 259.

- 37 教皇ヨハネス7世は、聖母に帰依した人物でヴァティカンのサン・ピエトロ聖堂内にも聖母に捧げた礼拝堂を造営し、その銘文に「聖なる神の母の僕—*Sanctae Dei Genitricis Servus*」と記した。なお、この礼拝堂内はモザイクによって飾られたが、その中心にはオランスのポーズで祈る女王マリア（後に剥がされて、現在はフィレンツェのサン・マルコ修道院所蔵）が表わされていた。A. K. van Dijk, *The Oratory of Pope John VII (705–707) in Old St. Peter's*, Ph. D. diss. John Hopkins University, Baltimore, 1995.
- 38 M. Lawrence, *Maria Regina*, 『Art Bulletin』, 7 (1924–25), pp. 150–161. ビザンティン世界では、宮廷の豪華な衣装で王冠を被る皇帝（皇妃）が現実に存在したために、それらと混同するような宗教的図像は避けられた。
- 39 聖母の握る錫杖は、元来、金属製のものが取り付けられていたが、後に剥がされ、テンペラで上描きされた。
- 40 十字架のついた錫杖を持つ勇壮な聖母の図像は、すでに5世紀のグラードの聖遺物容器に認められ、西方世界ではかなり早い時期から伝統化していた。
- 41 この言葉は、イコン制作時に周囲に配された奉納文の一節である。C. Bertelli, 1961, pp. 34–44.
- 42 主要文献は以下の通り。M. Andaloro, *L'icona della Vergine "Salus populi romani"*, in *Santa Maria Maggiore a Roma*, Firenze, 1988, pp. 124–127; G. Wolf, 1990; H. Belting, 1994.
- 43 H. Belting, 1994, p. 69.
- 44 M. Andaloro, 1988, pp. 124–127.
- 45 主要文献は以下の通り。H. Hager, *Die Anfänge des italienischen Alterbildes*, Wien–München, 1962, pp. 47–49; C. Bertelli, *L'immagine del Monasterium Templi dopo il restauro*, 『Archivum Fratrum Praedicatorum』, 31, 1961, pp. 82–111, e ID, *Pittura in Italia durante l'iconoclasmo: le icone*, 『Arte Cristiana』, 76, 1988, pp. 45–54; H. Belting, 1994, pp. 314–329; M. Andaloro, *Icona con l'Haghiosoritissa detta anche del*

- “*Monasterium Tempuli*”, in *Aurea Roma*, 2000, p. 378.
- 46 はじめの記録はカラカラ浴場近くのテンプリ修道院に認められるが、13世紀にはサン・シスト聖堂近くに移され、1575年にはサンティ・ドメニコ・エ・シスト聖堂へといたる。最終的に1931年に現在のサンタ・マリア・デル・ロザリオの修道院に落ち着いた。
- 47 首都コンステンティノポリスのカルコプラティア聖堂にあった聖母イコンと同型のもの。
- 48 M. Andaloro, 2000, p. 378.
- 49 この壁画はビスコンティによれば、3世紀の30~40年代と編年されている。
F. Bisconti, *La decorazione delle catacombe romane*, in *Le catacombe cristiane di Roma: origini, sviluppo, apparati decorative, documentazione epigrafica*, Regensburg, 1998, p. 124.
- 50 Tran Tam Tinh, *Isis lactans*, Leiden, 1973, 40ff.
- 51 S. Ensoli, *I santuari di Iside e Serapide a Roma e la resistenza pagana in età tardoantica*, in *Aurea Roma*, 2000, pp. 267–287.
- 52 A. Fraschetti, *La conversione. Da Roma pagana a Roma cristiana*, Roma-Bari, 1999, pp. 294–311.
- 53 サンタ・マリア・アンティークア聖堂壁画の聖母や聖人の唇にも、これと同様の貴金属の被覆の痕跡が認められる。
- 54 アエスクラピウス (*Aesculapius*) はギリシアの医療の神アスクレピオス (*Asklepios*) のローマ名。
- 55 奇跡を行うアスクレピオス (ヘラ、アルテミス、セラフィスもそのような能力で知られる) の治癒の手は、オットー・ヴァインリッヒによる研究テーマであり、本稿のコンテキストにおいてとくに興味深い内容を提示している。
O. Weinreich, *Antik Heilungswunder, Religionsgeschichtliche Versuche und Vorarbeiten*, 8. 2, Giessen, 1910, p. 1 e sgg., p. 137, pp. 151–152.
- 56 異教イコンの現存例についてはマシュウズの論文に終わりに一覧が付されている。T. F. Mathews, 2001, pp. 175–177.
- 57 たとえば、アンティオケイアの雄弁家リバニオス (314–393年) が神殿で目にした巨大なアポロ神の板絵が挙げられる。(リバニオスがテオドロスに宛てた書簡Letters 2. 1534F)
- 58 *Romana Pictura: La pittura romana dalle origini all'età bizantina*, a cura di A. Donati, catalogo della mostra, Venezia, 1998, p. 197, 301.

- 59 P. Brown, *Society and the Holy in late antiquity*, California, 1982.
- 60 M. Nilson, *Processions*, in *Oxford Classical Dictionary*, 2nd ed. 1970, p. 880.
- 61 この壁画はヴィア・デッラボンダンツァ (Via dell' Abbondanza) から出土したもの。Regio ix, 7, 1-2, officina infectoria in *Pompei, Pitture e Mosaici*, 9, 1999, pp. 768-773.
- 62 セフチェンコによれば、コンステンティノポリスで聖母イコンの祭礼行列をする際にも、運搬人は特別な胸当てをつけ、香炉などを携えた聖職者たちによって付き添われた。N. Sevcenko, *Servants of the Holy Icon*, a cura di Doula Mouriki et al, in *Byzantine East, Latin West: Art historical Studies in Honor of Kurt Weitzmann*, Princeton, 1995, pp. 547-556.
- 63 この浮彫は現在、ミラノのカステッロ・スフォルチエスコ内にある古代美術コレクションに所蔵されている。M.T. Donati/S. Masseroli, *L'affermazione del comune: un nuovo protagonista*, in *Longobardia Medievale: Arte e architettura*, a cura di C. Bertelli, Milano, 2002, p. 297, fig. 304.
- 64 *De Idolatria*, 212年あるいは197年執筆。筆者は以下の英訳を参照した。C. Davis-Weyer, *Early Medieval Art 300-1150, Sources and Documents*, Toronto, 1986 (reprint 1993), pp. 3-6.
- 65 *De testimonio animae*. 197年あるいは少し後に執筆。テルトゥリアヌス『魂の証言について』佐藤吉昭訳『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』編訳／監修上智大学中世思想研究所（加藤信朗）平凡社、1999、81-96頁。
- 66 ケレス (*Ceres*) は元来イタリア半島に伝わる女神。植物の発芽力を象徴し、夏に行われたローマの聖なるケレスの記念祭 (*sacrum anniversarium Cereris*) には、白衣を着て、髪リボンをつけたローマの婦人たちと若い入信者が行列を組んだ。
- 67 サトルヌス (*Saturnus*) はローマの神々のなかでも系譜が不明瞭であるが、サトルヌスの神官たちは幅の広い紫の縁取りをしたトーガ（上衣）の上にゆったりとした真紅＝ガラティア赤（皇帝の紫）のマントを着ていた。
- 68 イシスの祭礼行列では入信者は「明るい亜麻布の着衣」で参加した。
- 69 本稿注54参照。
- 70 ユノ (*Juno*) はイタリアの女神で、処女の生命力から派生した婦人の守護霊。
- 71 ミネルヴァ (*Minerva*) はユピテル (*Jupiter*) とユノと並んでローマ市の守護を司る女神。

- 72 『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』上掲書、95頁、訳注5、6。
73 『魂の証言について』第2章(1)、『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』
上掲書、84頁。

図版出典 図1, 3, 4, 6 : *Aurea Roma*, 2000 / 図2, 5 : M. Guarducci, 1989
/ 図7 : 『西欧初期中世の美術』小学館、1997 / 図9 : *Romana Pictura*, 1998
/ 図10 : *Pompei, Pitture e Mosaici*, 1999 / 図11 : *Longobardia Medievale*,
2002

[付記] 本稿は平成15年度花王芸術・科学財団芸術文化助成による成果の一部である。